

ゴミ減量と農地活用の一体化

東京の日野市は市民運動の活発なところで、ゴミ減量運動をベースに発酵菌を使って生ゴミを農地で直接たい肥化するとともに、これを「せせらぎ農園」として市民が地主をサポートするカタチでコミュニティガーデン（市民による協働農園）に活用してきた。あわせて都市農業研究会を開催して、都市農地を維持していくための方策等について勉強・協議を重ね、行政への政策提案等も行ってきた。これも含めた積み重ねが昨年4月の都市農業振興基本法成立、この5月の同基本計画のスタートを導いてきたといつていい。

炊き出しへの取組み

こうした取組みをさらに拡大・深化させる形で、ここ数年、炊き出しへの取組みに力を注いでおり、市内にある落川交流センターを拠点に隔月で行われている。参加者は1合の米と家庭で防災用に保存している古い缶詰を持参するとともに、せせらぎ農園で生産された野菜を利用し、

センター内で大きくなった樹林の剪定枝を薪にして備蓄保管しているものを燃やして炊き出しを行う。そのあと参加者全員で食事を楽しむながらの交流が行われる。直近では農家も含め53名の地域住民が参加。センターの倉庫に保管してある2升

時流を読む
市民が引き出す
多様な機能
農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

が、これにとどまらず地域のコミュニティづくりにも大きな役割を果たしている。

次々と湧き出る構想

炊き出し会と併行して「市民協働マルシェ」も毎月行われてお

炊き出し後の食事会にとどまらず「炊き出し子ども食堂」の開設について検討も行われている。

農地維持のカギを握る市民

こうした活動をつうじて地域住民のまわりの水田や畑を見る視線は確実に変わりつつあり、景観としての農地にとどまらず、食料の生産場所、さらに備蓄場所としても認識され始めている。これにともない地域内の農地は地域住民の共有地（コモンズ）としての位置を占めるようになってきており、相続や区画整理等による農地減少に対する地域住民の関心は高い。

の炊き出し用の釜5つを使って行われる炊き出しは壮観である。炊き出し用の水は水道水が使われているが、災害時にはセンター内にあるポンプ井戸が使われることになっている。炊き出しは緊急時の対応の訓練としてきわめて有効である

り、市民運動によって生きもの調査を実施している産地の米30kg／袋を家庭用備蓄として共同購入するもので、20袋以上が購入されるようになってきている。さらには農地を子どもたちのプレーパークとして活用する「子ども農園」や、

都市農業は多様な機能を発揮していくことが期待されているが、日野の取組みはこれを引き出していくのは農家と一体となつての市民の力であることを教えている。都市農地の維持のためには公共性・公益性発揮が必要条件であり、市民の参画がカギを握る。こうした動きが各地に波及していくことを期待したい。